

山本芳翠氏を痛む

望雲生

洋書界の耆宿として老畫伯の尊敬を拂はれたる山本芳翠氏は、十一月十五日を以て忽焉として歿したといふ。五十七歳未だ年に於て多しと云ふは、然も猶其作の幾多を見る可く、殊に其口述に於て明治前後の洋畫史を聞く可かりし予に於て、深く痛惜に打たれずんばならず。あゝ誠に悲い哉。

山本芳翠氏遺事

山本芳翠氏は嘉永三年五月、美濃國惠那郡明智町宇志野に生る。幼にして畫を好み、慶應元年北齋漫畫を見て、日本全國遊歴を企て、成らず。明治元年京都に出で、畫家小田海樞の門人久保田雪江に就て學ぶ。暫らくして支那に遊び、此に深く南畫を研究せんと志し、その便宜を得んが爲に横濱に出づ。氏が横濱に於ける數年は、眞に氏が最も窮乏の歴史にして、或は露店に或は奉公に、具さに辛酸を嘗む。幸にして當時横濱住吉町に在りて絹繪を描き居りし五姓田芳柳氏に知られ、遂に南畫を捨て、洋畫の趣味を取り、ワグマンに接近す。之より五姓田氏の門に在りて研鑽數年、明治十一年岸田吟香氏等の盡力により、漸く佛國に遊ぶを得たり。

の大家ゼローム氏の門にどり、刻苦十年學んで大に得る所あり、明治二十年を以て歸國し、居を芝區櫻田本郷町に卜し、茲に其畫室を設けし、嘗て教職に就ず、常に畫室に籠りて揮毫をのみ事とす。聲名漸く揚るに及び伊藤侯の知を得て今日に及ぶ。

明治二十年十月伊藤侯に従つて琉球に遊び、風景人物風俗畫二十點を描き、天覽に供するの榮を得たり。日清戰役の起る、之に従つて從軍畫家の魁をなし、又戰地寫實畫二十葉を献上し、明治三十六年勅使に隨つて滿洲に到り、三たび水彩畫十二枚を天覽に供し奉り、岡澤大將を経て、辱けなくも勅語を拜受するの光榮を得たり。

明治三十八年再び滿洲に渡り病を得て今年二月歸來し、靜養の傍猶筆を捨てず、鯉の瀧登り觀音像を終り、富士の繪に筆を執りつゝ瞑す。氏が作品中最も、嘆賞されたるは、症の爲に卒然腦溢血第一回内國勸業博覽會に出品して一等賞牌を受領せる「句當内侍」岩崎家に藏せらるる「十月高」の如し。

氏生來多藝多能の人、日本畫に精通し、美術益裁の鑑定に至る迄趣味と眼識を有し、且つ能辯能く人を樂しましめ、又劇場の背景の如き特に佛國に於て研究する所あり、遂に之を我國に教へ背景の祖と稱せらるるに及ぶ。人となり淡泊洒落人に接する毫も城府を設くる跡なく、其門に入る者皆師弟といはんよりは寧ろ親子の情を以てせらるるの感あり。彼の白馬會の如き、其初め氏の諸氏と創めしものにして、其旺盛は氏與つて大に力ありとす。

故芳翠氏逸事

▲白馬會の成立 和田英作氏曰く「白馬會の今日あるは山本さんの御陰である。つまり白馬會の首魁である黒田清輝氏が往年巴里に遊學した時の目的は何でも法律の研究であつたらしいのを其に繪畫の研究をさせたのは即ち山本さんである。平生山本さんは「日本に黒田といふ畫家を拵へたのは乃公だ」と口癖のやうに言つた位で今日美術界に勢力のある白馬會の成立も矢張山本さんの此畫室で組織され其れから同志の者が聖坂下の繩暖簾に這入り込み白馬を汲みながら質素な發會式を擧げたのが初りで、遂に白馬會と云ふ名稱が附せられたのは一面から見ても平民主義な平等無差別な清い美術の團體にしたいと云ふ考へからであつて即ち此黒畫は誰れであらう我山本さんなのであつた過去、現在、未來共に會に山本さんのあると無いとでは非常な相違が出来る。尙山本さんに就いては一つの痛むべき事がある其れは黒田さんが巴里から歸つて來ると共に今迄自分の門下生であつた人々を悉く黒田さんの門下生となし且つ其の門下生に教へて「黒田さん」と云ふ人は乃公より豪い人だから後君達に黒田さんに就て我教へた技の足らぬ處を補ふて貰ひ給へ」と言はれた程で大雅量のある人でなくては到底出来ぬ事である。(報知新聞)

▲古今集の翻譯と挿畫 當時佛國滯在中の西園寺侯と故光妙寺三

耶氏と古今和歌集を佛語に翻譯繪集と題して公にしたる事あり其時氏は囁せられて卷中に日本式の挿畫を描き有名なる詩人スリットゴーチの肖像の如きは非常に喝采に博したり、氏はまたホワトブルグ公園の珈琲店にも大きな日本畫を揮毫し其畫今に同所に遺れりと云ふ。

▲日本料理受負所 多藝多能なる氏は何にかけても妙ならざるはなかりし中に料理の道には餘程通じたりと見え佛國滯在中の氏が住居は宛ながら日本料理受負處の如き觀あり、公使を首め凡ての日本人始其馳走に與らざるものなかりしと云ふ、近來にては日本の酒の如き巴里にて求むるに難からねど氏が滯在の當時は飲みたくなき其品を得る道なれば氏は同地に在る酒を材料として之に種々の藥品を加へ角も角もして日本酒の味を作りたるが故に一種の缺點とも云ふべきは日本の酒は何れも杉の樽に容るゝ爲此樽の香があり一種の風味を増せ且詰りたる樽にては其香を鼻にするに能はざるなり、されば氏は此杉材にて樽を作らせ其風味を加ふること苦心したる程なり、また鶏卵と牛乳とを材料として豆腐を作り飽を採ね來りては、鹽蒸しをなすなど如何なる種類のものにて人の需めに應じて調理せしむるに會食終りてイザ勘定となりたる節には常に損耗を招きて自分の懐を痛めし、ナニ皆で喜んで食つてくれるから、損耗は埋め合せに成る」と云ふも意に介せざり。

▲絹帽で買ひ出し 料理に用ふる材料は少しも人手を煩はさず何れも自から市場に買ひ出しに出かくるを例としたるが或時フロックコートに絹帽を頂戴を携へて市場に出かけ玉葱を買ひ込みて袋が破れて玉葱はコロコロと地にこぼれたり、其時通り掛りし一人を見より氣の毒がりて玉葱を拾ひくれ、袋をまでも繕ひくれし爲に辛うじて我家へ持ち歸りたる滑稽ありと云ふ。

▲講談師より上手 これも佛國にて公使館に天長節の祝賀會ありし際の事なり、一人の講談師日本のお役所と聞きて參りしと云ふと門前に來りたるに「それは丁度いゝ處だ今日はお祝ひで宮殿下(閑院宮)も御臨遊ばして居るから一つ餘興に演らせやう」と相談さまり式場へ呼び入れたるはよけれど、此講談師維新前に日本を出た儘なりと明治の御前の事聞かず「寶船」と云ふ題にて演じ始めたるも宮殿下の御前なりと聞いて聲も知らずと云ふと云はん方なし、されば此講談師を歸らしめたる後公使館の人々は山本に何かやらせよと氏を引き出したり氏は悪くもせず義士録々傳の一節を演じたるに非常な喝采を博し宮殿下より日本でもこんな面白いは聞いたことがない、難有き御言葉賜はりて大に面目を施したりと云ふ(萬朝報)

▲知り合の初め 私芳翠君と知合ひになつたのは佛國西に居つた時である、君は繪畫研究の爲め明治十一年に佛國西へ留學して丁度明治二十年に歸國し、私が佛國西に往つたのは十七年で芳翠氏とは公使館などでチホヲ顔合せの許り年の上からも大分相違があり先づ交際などはしなかつた尤も其頃の私の佛國留學は決して繪畫の研究の爲めではない、法律を研究する目的で普通學を修めて居つたが當時公使館の書記生で私の保護人であつた橋口某と云ふ人の許へ私がよく遊びに往き慰みに繪畫を書いて壁へ張つて來たのを君は何時か見たのだらう、此人を繪畫にしたらならは相應な畫工になるに橋口やその他の人にも話した、歸朝後も故の佐久間貞一氏や或は私の親のところにまで來て「是非黒田を繪畫にしたらいい」と頻りに奨めた、併し其頃の私は他方面に野心を懷して居たので君の門下になつて繪畫を修行する考へなどは少しも起らなかつた君の熱心から遂に其の野心を打棄て繪畫を研究する考へになつた。(黒田清輝氏談日本新聞)

歐洲畫家一覽

(一十)

ル、ボロンニヤ派(ツマキ)

ジアカモテグリアウマンチ

ヤコボダ・パオロ (Giuseppe Averani) 盛時十四世紀の終
Jacopo di Paolo 十五世紀の初
マルコ・ゾッポ Marco Zoppo 盛時一四七二—一四八八年
フランシスコ・コッテイボリ Francesco Cottiboli 一四五〇—一五一七年
ロレンツォ・コスタ(L.コスタ) Lorenzo Costa (F.コスタ) 一四六〇—一五三五年
フランシスコ・コプリマチチオ Francesco Coprimacchio 一五〇四—一五七〇年
ルドウ・コカラチ Ludovico Carracci 一五五五—一六一九年
アグостиノ・カラチ Agostino Carracci 一五八—一六〇一年
アンニバレ・カラチ Annibale Carracci 一五六〇—一六〇九年
ギョ・リ Guido Reni 一五七五—一六四二年
フランシスコ・アルバニ Francesco Albani 一五七八—一六六〇年
ドメニコ・サビーエリ(D.サビーエリ) Donnicco Sampieri (Domenichino) 一五八一—一六六四年
フランシスコ・バルビーエリ(F.バルビーエリ) Francesco Barbieri (Guercino) 一五九一—一六六六年
キドカーニヤチオ Gu do Cagnaccio 一六〇一—一八一一年
ピエル・フランシスコ・コセラ Pier Fran. Mola 一六一二—一六八八年
エリザベッタ・ストラーニ Elisabetta Strani 一六三八—一五六六年
オモテナ・バルマ Tommaso da Modena 盛時一三五〇—一六〇六年
バルナボ・ダ・モデナ Barnabo da Modena 一三一六—一〇八年
バルトロメオ・グロツツィ Bartolomeo Grossi 一四六二—一五〇二年
ヤコボ・ロスキ Jacopo Roschi 一四六六—一五〇〇年
クリストフ・ロカセリ Cristoforo Caselli 一四九九—一五九九年
ロドヴィコ・ダ・バルマ(L.バルマ) Rodovico da Palma 十六世紀の初
Lodovico da Palma 十六世紀の初
マツツキ Mazzoni

其三弟と共に凡て十六世紀の初
ミケレ(Michele)
ヒエリラオ(Pierluigi)
フリッポ(Filippo)
アントニオ・アッレグリ(コッヂラオ) Antonis Allegri (Correggio) 一四九三—一五三四年
フェツララ派に接近す
フランツ・エス・コマツツオラ(F.コマツツオラ) Francesco Mazzoni 一五〇四—一四〇〇年
其門人ギロラモ・マツツオラ(Girolamo Mazzoni) 巧みに其師の作を模す。